

フルキョロ スィーリアの恋物語

The title 'フルキョロ' is written in a large, stylized, outlined font. To the right of the characters 'キョ' and 'ロ', there is a small illustration of a character riding a horse. Below the main title, the subtitle 'スィーリアの恋物語' is written in a smaller, simpler font, underlined.

空蟬

原作：Ricotta / 表紙：こもりけい / 挿絵：緑木邑

立ち読み版



登場人物紹介

Characters



スィーリア・クマーニ・エイントリー

ウィンフォード学園三年生で学生会会長。その美貌と堂々とした姿勢で全校生徒から強く支持されており、ジョストでも神に選ばれたと言われるほど確かな実力を持つ。くまのぬいぐるみ収集が密かな趣味で、自室にたくさん置いている。



き さ き み お
希咲 美桜

家庭的な性格で家事全般が得意な少女。以前から知り合
いの貴弘に何かと世話を焼く。



ノエル・マーレス・アスコット

侯爵家のお嬢様。
明るい性格で人懐こい。
ジョストの腕は一流。



リサ・エオストレ

類い希なジョストの才能を持つ一年生。普段は無口で無愛想。



りゅうぞう じ あかね
龍造寺 茜

貴弘のクラスメイト。負けん気が強く堅物な性格。スィーリアを尊敬している。

れい な
玲奈・F・エイヴァリー

いつも笑顔の優雅な先輩。学生会の副会長。

ベルティーユ・アルチュセール

自信家のお嬢様。高飛車で多少口うるさいが、どこか憎めない性格。

ひら ぎ あや こ
柊木 綾子

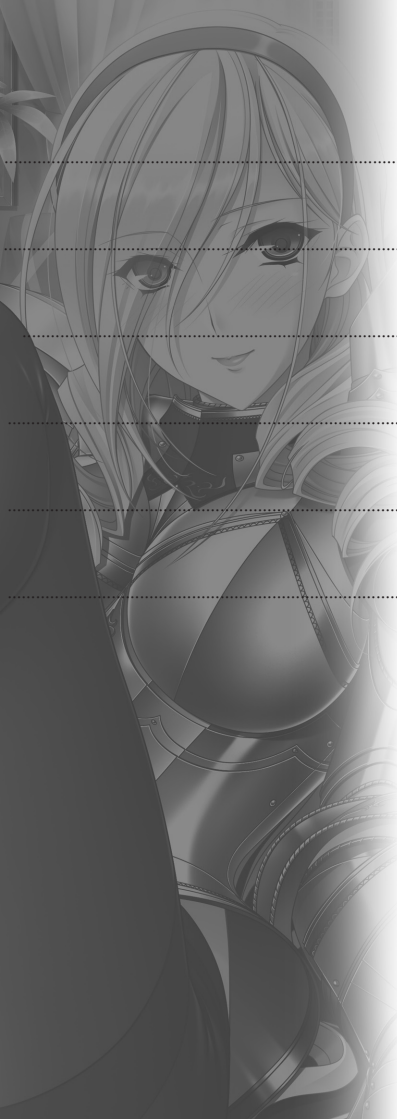
貴弘の従姉。
ウィンフォード学園の保健医兼タルトタイムの店主。

カイル・L・オルブライト

貴弘のクラスメイトでベグライターを目指す青年。

みず の たかひろ
水野 貴弘

ウィンフォード学園二年生。怪我のため騎士の道を諦めてベグライターを専攻する。



CONTENTS

○プロローグ	7
○第一話 騎士たちの日常	12
○第二話 サマープールで大熱戦	52
○第三話 決意と誓い	109
○第四話 たくさんの、はじめて	145
○第五話 往くべき道	209



「うくっ……!!」

甘美にまどろむ目を盗み忍んできたスイーリアの左手が、がら空きの男の乳首をつまみ、指の腹で、爪で、好き放題に弄りだす。

「男でも、感じるのか……。貴弘も、私と一緒にだな……。んっ、ふふ、ふあ、ア……!」

愉しみ、喘ぎ、そして再び亀頭へと舌を這わせてはカウパーと唾液とが混じって泡立つ濁液を啜り上げ。また喘いで、男の肉欲をこの上なく刺激する。

もちもちの乳肉に潰された肉の幹と、ネットリと熱くざらついた舌尖にほじられた尿道口が、歡喜に悶えて脈を打つ。

「はあっ、あ……!! あく、ううっ! も、もお本当につ……」

腰の奥から駆け上った射精衝動は、すでに背筋を突き抜け、脳へとひっきりなしに信号を送っている。唇を噛み堪えてみても、衝動をわずかに押しとどめ、遅らせるのがやっとだ。

「もつと、もつと気持ちよくなってくれ。私で……。私の……。胸と唇と髪で」

ぢゅぽっ——音が聞こえそうなほどの勢いで亀頭へとかぶりついたスイーリアの唇が、すぐさまキュウキュウと髪束の巻かれたカリ首を締め始める。舌尖でざりざりと擦られた彼女自身の髪が、新たな摩擦熱を肉棒に植え込んでいった。

すっぽりと唇に包まれた亀頭から、止め処なく歡喜の証である先走りがほとばしる。恋

人の口内に注がれ、唾液と混じってヌメリの増したツユは、即座に啜られて喉の奥へと流れ落ちていく。

スイーリアの尻が、フリフリと物欲しげに揺らいでいる。煽るみたいに見つめてくる瞳も潤みを増して「早く、早く」とせがんでいるようだ。

「んぼっ、ン……えはあつ、は、ふっ……ぢゅぼっぢゅぼぼぼおおっ！」

肉棒を口いっぱい頬張って、上目遣いの恋人がカウパーごと腰の底に溜まる煮えたマグマを吸い上げようとする。

「ふあはひろろ……ろろろ、ふおふひっ……ほひっ、んっぢゅぢゅうううう！」

貴弘の、喉の奥に——欲しい。

訴えかける恋人の痴態を見逃すまいと、瞬きすることも忘れて自ら腰を振る。恋人の頬裏にゴシゴシとぶつかり扱かれる亀頭から、ズクズクと歓喜の衝動が突き上がっていく。吸いつくように密着する乳の谷間を擦るたび、頭の中でなにかが弾け、白一色に染め抜いていった。

髪の間がなければ、とっくの昔に吐き出してしまっていただろ情欲の塊。熟成され熱と濃厚さを増した白濁のマグマが、勃起内部を駆け上がる。

「らひへっ……！」

——ぐりゅっ！

出して。叫んだ彼女の左手が、つまんだ乳首をひねり上げる。まるで、それが合図だったかのよう——。

ドクンッ——！

「ぐっ……うあああああつ！」

感極まり裏返った声と共に、絶頂に達した。

ビリビリと衝撃が背を伝い、持ち上がった腰の先から白濁色の奔流となつて噴出する。ヌルつく舌に覆われて今にも溶けてしまいそうな亀頭から、火照りぬかるむ彼女の口内へ。より熱く、粘り気を伴う白濁の塊を注ぐ。

「んん……っ！ んっ、んんんっ！ んふうっ、ふっ、ううんっ……」

そのすべてを、鼻で荒く息をしながら受け容れ、スイーリアは飲み下してくれた。

「あぷっ！ んっ、んぷふあつ……ぢゅりゅっ！ ぢゅぢゅずっ！ んくっ、んんんっ……んくあ、ああ……！」

摩擦で赤らんだ乳の谷間を突き抜け、肉槍が雄叫びめいた脈動を刻む、その都度。鼻の下を伸ばし、吸いついたスイーリアの喉が鳴る。

「う、あああつ……そ、んなに吸ったら、ま、またあつ……！」

どびゆるううっ！ びゅぐっびゅぐぐっ！ びゅりゅっ！ ぶびよりゆるる……っ！

射精直後の敏感な亀頭を強烈に吸い絞られ、絶頂の波は続く。すぐさま装填された第二

弾が、尿道を震わせて喜悅の渦となり、貪欲な恋人の喉元へとぶちまけられてゆく。

(くらくら、する……)

広いとはいえ、個室内にふたりきり。汗だくになりながらの射精はひどく気だるく——不思議と心地いい。腰の根元の甘いしびれが、スーリアの唇と乳と髪の圧力に応じ、引き伸ばされたみたいに延々と続いていた。

「んぶあつ……」

射精後も吸いついていた唇がようやく離れ、はあ……と熱い吐息を漏らす。

解放されたというのに、巨乳の谷間に収まったままの肉棒はビクビクと悶えっぱなし。

(急に外気に触れたから……?)

違う。垂れた舌先の精液を啜り、火照った肌に汗を浮かべ、トロンと蕩けた瞳で見つめてくる彼女の肢体を、もつともつと悦よろこばせたいと思うから——。

「んくっ……おなかの中が、貴弘のでいっぱいになってしまった……」

——まだ、終わりではないでしょう？

そう、青い瞳は告げていた。

「……立って、壁に手をつけて。お尻をこっちに……」

「ああ。こう……これで、いいか？」

言われたとおりには体勢を整えた恋人が、物欲しげな視線をよこしてくる。一度射精した、

させたくらいじゃ収まらない。おたがい同じ想いを抱いて再度、睦み合うことを選択する。「スィーリアのお尻も、大好きだよ」

目の前に突き出された臀部を手のひらでなで、感想を告げた。

事の発端となった試合中の接触事故で触れたのは、ベルティエユの胸と、玲奈先輩の尻。先ほど恋人の乳房を褒めたのだから、今度は尻への愛情表現をするのが当然。そう、思ったのだけれど。

「ば、馬鹿。そういう恥ずかしいことは……う、嬉しいが、その……」

予想外の照れた反応に面食らう。どうやら攻守交替の格好となったことで、少々理性を取り戻してしまったらしい。

(そういうことなら……)

遠慮しない。尻の上に置いた右手で彼女の尻全体をなで回り、水着のショーツに浮いた谷間のラインに沿って焦らすように指を動かして反応をうかがう。

「ふあっ！ ああ……こ、こら。じ、焦らすのは、ダメだっ……」

ジュクジュクとあふれた蜜の感触が指先に伝わってきた。

(意地悪するつもりは……ないんだけどな)

ただ、しつとりと汗ばんだ尻の感触がたまらなく心地よくて、ついつい触り続けていたくなる。

「か、身体がもう熱くなってる、んだっ。だから……は、早くうっ……」

あまり時間をかけすぎれば、誰かが呼びに来ることも考えられた。

焦れに焦れたスリーアのうなじから背へ、汗がひと筋垂れ落ちる。両手に余るくらい大きな尻が、まるでむずがる子供のようには震えていた。

「……それじゃ、いくよ」

そつと添えた指で、水着をめくる。剥き出された恋人の股間からしとどにあふれた蜜汁が、幾筋も連なり床へと滴り落ちていった。

「あ、ああっ、は、早くうっ」

——ぢゅぶっ……。

懇願する彼女の求めをさえぎって、おもむろに濡れたそこへ、右の中指を沿わせてみた。
「くううんっ」

蜜と汗で蒸れほぐされた肉の唇。じつとりと熱を孕んだその割れ目は、軽くなでただけでヒクリヒクリと蠢いて、内側からたつぷりの蜜を吐きこぼす。

十二分に湿り気を帯びた柔肉の状態を見る限り、前戯の必要はなさそうだ。

「今度は……一緒にイキましよう」

「あっ、ああ……一緒に、き、気持ちよくな……るうううっ」

自らの手で支える勃起ペニスを、幾度かグチグチ。馴染ませるように恋人の女陰へと擦

りつけ。じわりと浮いた歡喜の証、先走り汁をすりつけ、脈動と共に合図として伝える。

ぐぶ……っつ。

「はひ、いっ……！」

浅く、カリの先っぽがぬかるむ膣肉を割り裂いた。広げられながらキュウキュウと締めつけてくる肉の穴。その弾力に富んだ圧力を押し戻すかのように。

——ずぶ、ぶぢゅぢゅぶぶううっ！

「はあう、ううああああアア……！」

ひと息に、愛しい尻を引き寄せて肉の槍を根元近くまで突き入れた。

(……っ、スイーリアの中に、全部っ……入った……)

コツ、と膣壁とは違う感触に行き当たり、肺に溜まっていた息を吐き出す。

受け容れたスイーリアは、唇震わせながらも嬉しげな顔。かと思えば早くも、膣壁でやわやわと肉棒を歓迎し始めた。

「はあ、あつああ……わかる。貴弘の、硬いものが……私の中を埋めて、熱と脈とを刻みつけてくるっ……ンう、ううンッ……！」

締めつけられたペニスの幹が、たぎる血潮をみなぎらせ、雄々しい脈動を響かせる。

たっぷりと溜まった蜜汁で満たされた膣内は温かで、どこもかしこも、押せば食い入るほどに柔らかくほぐれていた。

「……っ、動、くよっ……」

嬉しそうに頬緩ませた恋人の表情と、歓待の意思を示して締めつけ続ける女の深部。右手のひらを置かせてもらっている臀部はじつとりと汗ばみ、ますます吸着感を強めていく。我慢なんて、できるわけない――。

ぢゅず……っ！ ずぬにゅっ！ にゅぶ……ぶぶぼっ！

長く、緩やかなストロークで、ぬかるんだ腔肉を抉る。腔壁は小刻みな蠕動ぜんどうを繰り返しながら、より貪欲に肉棒へとしがみついていた。

「ひっあア……ッ！ はひあっ！ あっ、あふあ、ああんっ！ た、貴弘おっ」

切なげな声を張り上げ、玉の汗の浮いた背を反らせて恋人が啼く。反った背に食い入るブラひもを目で追うと、今にもはみ出しそうな脇乳が目に入り、すぐにでももみしだきたい衝動に駆られる。――が、今はまだ。スイーリアの中をじっくり味わってもいたかった。

「ふあっ、あっ、あ、あひいっ……おなかの奥にまでっ……届いているっ……あく、ううああんっ！ そんなにつ、ゆ、ゆつくりとされたらああっ」

緩やかなピストンに焦れて、スイーリアのほうからピタピタと腰を押しつけてき始める。唇を噛み、声を殺しながらも快楽を享受するその姿は、少し前の自分とそっくり同じ有様だ。

（俺が感じたのと同じくらい。それ以上にスイーリアを……！）

愛でて、どこまでも淫らに乱してみたい。

——ぢゅぶりゅりゅぶつ……！

覆い被さる気配を察したのか締めりの増した膣肉を再度奥深く割り裂き、そのまま両手で左右の乳房をもみしだく。

「ひゃうっ、んううんっ！ 胸と一緒にっ……ひあ！ あっ、あひっ……ダメだ、か、感じすぎて、声っ、がっ、アア……」

「防音されてるみたいだし……我慢、しなくていいですっ。俺に……もつとエッチな声を聞かせてください……！」

声を抑えられそうもない。振り向き訴えかける青い瞳を見つめ返し、笑顔で応じて。

——ぢゅゅううっ！

「くひっいああああ……！」

いったん引いた腰を思いきりぶつけ、亀頭で膣壁の上側を擦り上げた。

(くうっ……！)

ジンジンと甘くうずく肉棒を押し込みつつ、目を瞬かせ息も絶え絶えに喘ぐ恋人の耳を軽く噛み、舌で舐めながら、左の手で彼女の脇腹をさする。

「ひう……！！ い、じわるうっ……私が、そこっ、弱いと知って……てえ……」

効果は抜群で、肉棒への締めつけと、絡む蜜液の濃度が一段と増した。すねた恋人の口



振りがよけいに牡の肉欲を刺激して、膣肉を震わす脈動も一段と雄々しさを増す。

「スイーリアが感じてくれた分だけ、俺もっ……」

繋がりあった部分から、卑猥な音色がひっきりなしに轟いて、ピストンのたびに蜜と先走りの混濁液がこぼれ落ちる。

「ふあっ……あ、あっ……ああ、いいっ、のお……っ！ 貴弘と一緒に、だから……強く、抱いてくれるのが、たまらなくっ愛しくてえええっ」

嬉しいことを言ってくれる。乳房に添えた指に熱がこもっていく。水着越しにも、指が食い入る柔らかな乳肌が、負けじと熱を孕ませて小刻みに震えている。

「少し、冷えちゃった……?」

震えているのは、身体が冷えたせいなんかじゃない。わかっているがらわざと尋ね、さわさわと水着からこぼれた部分をなで擦った。

「ふうっ……あっ、ああっ！」

反射的に身をのけ反らせ遠ざかろうとする乳房を、しっかりとつかみ直し、抱き寄せる。
(やわら、かい……)

身体をうつつ伏せに折り曲げているせいで釣り鐘状に垂れ下がり、いつも以上に大きく感じる柔肉が、つかんだ手のひらに収まりきらず。指を食い込ませるそばからムニユリムニムニ。汗で滑ってこぼれ落ちていく。

「すまん。つい、はしゃいでしまった」

至極落ち着いた口調のスイーリアだが、少し目線を落とし気味などところを見ると、先刻のスキップについて少々ばつが悪く思つてはいるようだ。

「明日は練習は休んでくださいね？ あと、今夜はお風呂上がりにもご自分で丁寧にマッサージして、よくほぐしてから眠ること」

せっかくにこやかだった恋人の表情を曇らせるのは本意ではないが、小言で釘を刺すのも大事な役目。そう思い、心を鬼にして念を押しした。

「ふふ、まるで母親みたいだな」

「世話焼き女房、くらいにしといてください」

軽口を叩きつつ、特に張っている内腿の部分をもみほぐしていく。

「んっ……う」

指をグッと押し込むと、彼女が妙に艶めいた声を上げた。

「痛かったですか？」

「い、いや。そういうわけでは……ないのだが、な……」

具足を外し現れたストッキングは、熱戦の余韻を残し、大量の熱を孕んでいる。彼女の言葉の歯切れが悪いのは、決まっていつもある想いを抱いている時だけ——予想を肯定するように、見下ろしてくる青い瞳は潤み、きらめいていた。

そこそこの広さがある室内なのに、鼻先で漂う恋人の体臭、その一点にのみ意識惹かれ、夢中になる。

誘われるがまま鼻を寄せ、恋人の股間附近で息を吸う。

「くふっ……うっ、あ……汗臭くは、ないか……？」

「イイにおいです。甘くて、いつもより濃い感じがする……」

——ぶにゅっ。

「ひあんっ!？」

不意打ち気味に鼻先で、中心部分を押す。ストッキングのざらついた感触越しにも、弾力に満ちたその箇所の柔らかさを感じ取ることができた。そして、ストッキングから透けて見える白い下着。今しがた鼻で触れたその部分が——。

「湿って、る……」

感じたままの感想を口にする。

「い、言わないで、くれ……恥ずかしい」

口振りに相反して、彼女の腰はまるでもつと嗅げと言わんばかりに、鼻先へと押しつけられてくる。熱孕むストッキング越しに感じるヌルついた感触の正体が汗だけでないことは、香る甘酸っぱいにおいからも明白だ。

「すう……は、すううっ……どんだん、濡れてきてます……すううっ」

鼻を使い、わざと割れ目部分をなで擦る。摩擦を浴びたそばから恋人の恥丘は痙攣し、中心部からまたトロリと甘酸っぱい蜜を染み出させる。

広めの室内にふたりきり。なおかつベンチに腰かけた恋人の股に顔をうずめるという稀
有な状況が、かえって刺激を高め、行為への没頭を促してくれた。

「く、くすぐったいからっ、あっ……ひゃう！」

「れる……ん、ふうっ……ぢゅっ！ んぢゅううっ！」

鼻先で押し込んだストッキングがショーツに食い入り、くつきりと浮かんだ縦のスジ。
そこを執拗に舌で擦り立て、染み出るそばから甘い蜜を啜る。

「お、なかの奥っ、響っ、くう……！ あ……はっ、ああんっ！ んんうう……！」

むずがるみたいに身をよじり、腰くねらせたスイーリアが煩悶する。その様がたまらな
く愛しく感じられて、ますます舌による愛撫と、蜜を吸引することに没頭した。

割れ目の上部に硬く突き出た部位があるのを見つけると、すぐさまそこに舌を這わせ、
ツンツンと執拗に刺激する。

「ひあ！ あっ、ひ……そ、こは、ダメだっ。感じすぎてしまっ、ひああっ！ あっ、ひ
……っ、だあっ、めだと言っああっ、ふあ、あああ……んっ！」

（いつも以上にふくらんで……スイーリアも、この状況に昂奮してる……のか？）
同じ気持ちであったとしたなら、よけいに嬉しい。感謝の意も込めて、舌の圧力を強め、

ひたすら割れ目部分を舐め擦った。

「ふあう！」

反射的に浮いた彼女の腰の下へと手早く左の手のひらを這わせ、そのまま落下する柔らかな臀部を抱き留める。

「大きめで、プニプニのスイーリアのお尻。すごく魅力的で……大好きです」

「はふっ……んっ、んんっ……！ 褒めてくれるのは嬉しいっ、だが、あっひうっ！
だっ、あああふああっ！」

羞恥にまどろむほど、彼女の身体は敏感になる。知っているからこそ言葉と行動で、恋人の羞恥心を煽り続けた。

さわさわとまさぐった尻肉は、むっちりと肉の詰まった感じがして、触れたら最後手放したくない——そんな強い独占欲に駆られてしまう。ストッキングの触れ心地と内にこもる体温も相まって、じつとり指に吸いつく感触がたまらなくいやらしく、愛しく思えた。

「お尻触られるの、そんなに気持ちいいですか？」

「ふあ……？ そ、それは……あ、ああっ」

鼻先に戻ってきたショーツの割れ目を見つめれば一目瞭然。甘酸っぱい香りはよりいっそうきつくなり、縦スジに沿った黒い染みがジワジワと現在進行形で拡大し続けている。

それでもじかに想いを告げるのを頑なに拒否しようとする恋人の尻を、またひとりで。

同時に隆起して位置が丸分かりの肉豆を右手の指で弾き、口よりも素直な身体のほうを責め立てた。

「お尻もどんだん熱くなってるし。それに、ほら。もうクリトリスがショーツの上からもわかるくらいに勃起して」

「た、貴弘っ。くふうっうう……今日のキミは意地悪だあ……っ」

羞恥極まって、今にも泣き出しそうな顔をした恋人のすねた声音に煽られて、ズボンの奥で隆起したペニスがいきりに脈打ち、訴えかけてくる。

(まだ、あわてるなっ……)

だが今は、まだ彼女の愛らしい様子を見つめていたい。劣情と慕情と独占欲の混濁した想いに突き動かされ、なお押しの一手を試みる。

「あなたの口から、どうしても聞きたいんです。今の、素直な気持ちを……聞かせてください」

「あ……ふあ、うう、それ……は……」

股下から視線を上げ、まどろんだ表情の恋人と見つめ合う。傍から見たらずいぶんと変態的で滑稽な姿だろう。

だが、その懸命の訴えが功を奏したのか。尻を振り腿をもじつかせながら、ゆっくりと彼女の唇が動き出す。

「わ、私は貴弘の……手と指と舌とで感じているっ」

「どこが、気持ちいいですか？」

「う、うふうううっ……お尻と、お……」

「お？」

——ぢゅちゅううっ！

続きを言つて。そう、目で訴えつつ再度舌をストッキングへ押しつけ、割れ目部分を吸い立てる。

「ひううっ、や、ああひっ、お、お股っ、お股だっ。股の部分がうずいてえっ、気持ち、いっ……あああっ！」

顔中真っ赤になりながら言い募つた彼女の股肉の震えが、鼻先にありありと伝わつた。這わせた舌に止め処なく染み出る蜜汁の、一段と増した甘みが行き渡る。

羞恥の極みにあるはずの恋人の腰が、積極的に自ら前後に揺れだしていた。

ぢゅづづっ、ぢゅッッ！ れぢゅっぢゅぶあっ！

（暖らないと……あふれるヌルヌルで。スイーリアのにおいと味に、窒息させられる、かも……）

それはそれで魅惑的に思えたが——。

愛撫がしやすいようにと、脚も気持ち広げて、股間を押しつけてくるスイーリア。その

股間が小刻みに悶えていることに気づき、彼女の願いに応えようという想いが強まった。甘酸っぱいにおいを肺いっぱい吸い込んで、なおいつそう割れ目に沿った舌愛撫の速度を上げてやる。

「あひっ！ た、貴弘っ……やつ……ああ、待つ、てええっ！」

腰を振り立てながらかかちを持ち上げ、つま先を震わせて、何かに耐えるかのように下唇を噛んだ恋人が切なげに訴えかけてくる。その理由を、鼻先で、舌で如実に感じ取り。

「んぶ……ちゅっ、ちゅっ！ ちううう……っ！」

充血しているであろうクリトリスに狙いを定め、強めに吸い立てた。

「いひゃっ……あっひあああああ……っ！」

続けざま、たつぷりの唾液と共に舌にくるんで扱けば、ビクビクと彼女の背が反り返る。危うく後ろへ倒れそうになった恋人の身体を、尻を抱き締めることでどうにか支え、よりいっそう鼻先へと抱き寄せる。

舌を突き出し身悶える愛しい人の表情を、余さず見届けよう。決意を胸に、舌先でくるんだクリトリスを押し潰した。

——ぐりゅっ、ぐりゅりいっ！

「やあ、ああっ、出るう……こんなところで、またああっ！」

潤む瞳の端に、涙が浮かぶ。羞恥の限界を超えたことを示すみたいに、舌でくるみ唾液

に浸したクリトリスが震え——。

「ふあ……あああああ—— ツツ……!!」

——しやあああああつ……。

深い快楽に浸りきった彼女の嬌声と共に、黄色い尿液がほとばしる。

シヨーツの奥で弾け、ストッキングにまで染みを広げていくアンモニアのおいが、接した鼻先へと漂ってきた。

「……ぢゅっ！」

「ひやあう！ だ、だめっ……す、啜らない、でっああああ……!!」

密着したことでより強く感じる尿の香りと、熱とに誘われるがまま。漏れ出るそばから啜って、喉を鳴らし飲み下していく。

唾液と蜜と尿液とで濡れたストッキングは、吸引のたびに卑猥な音を立て、伸びきってしまう。ホカホカと湯気立つほどに熱のこもるその布地は、それでもなお口づけし続けたくなる魅力を損なわずにいる。

(おしっこのしよっぱさに、甘い……味が混ざってる)

舌先で確かめた恋人の秘唇は、始終プルプルと震えっぱなしの状態だ。噛み締めた唇。潤んだ瞳から涙をひと筋流して、感極まった嬌声を張り上げる。そんな恋人の姿を見、確信する。

「ふう……っ、ああア……!! はっ、ひ、あ……あああっ!!」

放尿の解放感を覚えると同時に、スィーリアは軽い絶頂にまで達したのだ。

「ぢゅちうっ……!! ぢゅっ、ぢゅううっ、ぢゅうぢゅううっ!!」

喜悅に浸る恋人のために今できることは——少しでも余韻を長引かせ、より高みへ導くこと。

「ひあうっ、うあ、あくうっ、んああんっ! そんな、にっ、クリクリされたらっ、あっ、また、出てしまおうっ……粗相、してっ、んううううっ……!!」

ぷしゃっ……ぷちやあああっ……。

唾液と尿と蜜でヌルヌルの舌先で勃起したクリトリスをねぶり上げ、すり潰しては噴き上がる尿液の勢いに感じ入る。止め処なく漏れ続ける液体を、砂漠で得た水のごとく貪欲に飲み干していく。

「……ぷは」

やがて——とうとう一滴も出なくなつたのを舌で確かめて、ゆっくり、名残を惜しみつつ唇を離す。吸引し続けた舌は疲労ししびれていたけれど、汁まみれの唇は無意識に満面の笑みを形作っていた。

「うう、今日の貴弘は、意地悪なだけでなく変態が過ぎるっ……」

「あ。えと、スィーリアが気持ちよさそうにおしっこするの見てたら、つい」



「くふっ、うんっ……こ、こら。私の胸は食べ物ではなっ、あ、あー……っ」
くすぐったさと面映さ。喜びと悦びに肩震わせ、文句を言いつつもぎゅっと抱き締め
くれる、愛しい人。

スィーリアの献身に応えたいと、心から想う。

（ふかふか、だ……）

自重に任せているとどこまでも顔が沈みこんでいきそうな、柔らかな乳肌。ふたつの頂
に挟まれて、その弾力と餅肌ぶりを堪能する。呼吸するたびに肺いっぱい広がる彼女の
甘い体臭までもが愛おしく、心臓と、股間とが高鳴りっぱなしだ。

ズボンの奥でガチガチに強張る勃起ペニスを、たまらず彼女の太ももに押しつける。

「あ……もう、こんなに……」

うっとりとした声で吐き出した直後。スィーリアのしなやかな指先が牡のふくらみに
抱きつき、そのまま手のひらで覆うように優しくなで練り始めてくれた。

（うっ、あ、くうう……ズボン越し、なのにつ……位置も、状態もばれてるっ）

すっかり慣れた手つきの恋人の指と手のひらが、確実に勃起の感じる部分——カリ首や
尿道を探り当て、入念に摩擦を加えてくれる。

「んっ……ふ、ああ……息が胸にかかる……。貴弘のっ……息が……ああっ」

乳の谷間にうずまりっぱなしの鼻先から吹き出す荒い吐息を浴びながら、スィーリアの

呼吸とズボン越しの手のひらも、じつとりと熱を帯びていった。

じわじわと染み入るみたいな性感の高まりを覚えつつ。

(このまま……おっぱいにうずもれた、ままで……)

男冥利に尽きる体勢で果てるのもいい——そんな風に考え始めた、矢先。

「た、貴弘……」

突然、のしかかっていた女体がゆっくり起き上がり離れていって、至福の極みにあった顔面が急激に外気で冷まされた。

「……スイー、リア？」

戸惑いの声と表情を捧げた先で。

「今日は私のほうから……させて。気持ち伝えさせて欲しい」

ちゅぽん、と音を立て唇から離れていった乳肌と、頬をすっかり上気させた恋人は、意図を告げるなり身体の向きを前後反転。

そうしてまた再度柔らかな肢体を抱きつかせてくる。

「うわ……っ!!」

戸惑っている間に彼女の体勢移動は完了し、瞬く瞳の真上にロングスカートに包まれた恋人の腰が跨ってきた。

頭上十数センチのあたりで停止した恋人の腰を包むロングスカート。勢いでふわりとふ

くれたその裾に呑み込まれてしまったために、視界は一瞬にして薄暗闇に覆われる。

(お、おとおお……っ！)

薄闇の中、仰向けの視界に浮かび上がる、桃の形の物体。黒い、ハイレグ気味のショートで包まれたスリーリアの尻が、ゆらりゆらゆら。恥ずかしげに、揺れていた。

「最近、キミにされるがまま、だったからな……今日は、私がキミに奉仕する……」

スカートの中で恋人がどんな光景を目にしているのか気づいているのか、いないのか。スリーリアの声に、先ほどまで以上の艶が入り混じっている気がする。

(脱がされて、る……)

カチャカチャと己のズボンを留めるベルトが外されていくのを、響く音色と、剥き出されていく腿肉に触れた彼女の指の感触から察知した。

前後互い違いの体勢。俗に言うシックスナインの体勢で恋人がなにをしてくれるつもりなのか。ようやく理解した肉棒がムクムクと、トランクスの内側でますます鎌首をもたげ、テント張る。

「窮屈そう、だな……今、出してやるから……ん、しょ……きやう!!」

——べちんっ!

突っ張ったトランクスを下げられ顔を出した肉棒が、勢い余って恋人の美貌にぶつかり、火照る頬を一度、二度とピンタした。

「ご、ごめんっ……」

さすがに己の情欲の深さに恥じ入り、謝罪する。

けれど謝られた彼女のほうは――。

「ふふっ……相変わらず、元気のいいやつだな。キミの分身は……」

――ちゅっ。

「~~~~っ!?!」

露わになつたばかりの蒸れた亀頭に、もちもちの弾力を備えた何かが吸いついた。

(キス、されてるっ……俺の、に、スリーリアが、キス……っ!)

直視できないだけに身構えもならず。無防備なところを襲われた勃起はなすがまま、もろに快楽を浴びるはめになる。

「あむ……ちゅ。ちゅう……っ」

「うあっ……!! い、いきなり先っぽおっ……!?!」

急に生温かな口内に包まれたと思つたら即座に強く吸い立てられ、腰が甘美に悶え狂う。ひとりでに浮き上がりかけたところを押さえ込まれて、再度チューチュー。

おまけにへそあたりに感じるもっちりとした肉感。

(こ、れって……ま、まさか!)

先ほどまで舌で、唇で味わっていたのと同じ感触が、もろにべったり。のしかかり、抱

きつきひしゃげたそのふたつのふくらみは、さえぎる布地が一切ないことを伝えるように、スリーリアの動きに乗じてズリズリ。密着する腹部と擦れながら上下する。

しこりの増した勃起乳首による摩擦は、双方の身体に喜悦のしびれを付与してくれた。

「んぷあ……っ！ 擦れるのが、い、いいっ……」

反射的に頭を上げた恋人の唇から漏れ出た吐息が龟头をかすめ、まぶされた唾液が吹き散る。外気に冷まされかけた肉棒の幹を、悦楽に喘ぎながらも恋人の両手のひらが温めてくれた。

「く、うっ……スリーリアっ、ブラジャー……はっ……？」

「暑くなった、のでな。外してしまった」

答える恋人の艶めき潤む声音が、まるでこの状況を楽しむ小悪魔のそれに聞こえて、またドクリと強く、腰の芯が弾む。

学園の控え室で鎧を着たまました時も、多々あったはずの他の機会も含め、思い返すとしばらくじかに拝めずにいたスリーリアの乳房が、今。己の身体とみっちりくっついて、乳首まで立てているのだ。

（見たいっ……！ 直接この手でっ、さ、触りたいっ、のに……くううっ）

どのような形にたわみ、充血した乳輪はどんな色になっているのか。記憶にあるだけに、より如実に、想像と欲求が膨張の一途をたどってゆく。

この目で確かめたいとの思いに突き動かされ、頭に被さるスカートから、上体を揺らし、
ての脱出を試みた。

「あん……っ。こ、こら、あまり動くと……うまく、おしゃぶりでできない……」

少しだけすねた、相変わらず蕩けた調子の声音でスイーリアがぼやく。

「そ、んなこと言われたって……っ」

ゆるゆると両手で勃起を扱きつつ、改めて唇を亀頭に近づける彼女のもたらず刺激に、
腰は小刻みに身悶え続けていた。その振動も、脱出を阻害する一因だ。

乳房の視認を諦め、視界のすぐ先にある尻肉を愛撫しようにも、今度はスイーリアの乳
首摩擦と、亀頭に吹きかかる吐息。ジンジンと響く喜悦のしびれに邪魔されて、叶わない。
身体の快感は右肩上がりに高まっているのに、なぜだか生殺しにされたように感じ、気
ばかり逸っていった。

「……っ、あ……。お、おとなしくしてもらうため、だぞ……？」

——どしんっ……！

「……むぶあつ!？」

どういう意味——？ そう思った次の瞬間、乳房にも負けぬ弾力の塊に顔面を組み敷か
れる。ベッドに後頭部を沈ませながら、きしむスプリングの音を聞く。

シーツの柔らかさとはまた違う、プリプリの圧力に押さえ込まれ、状況を確かめようと

伸ばした手が、反動でめくれたらしきスカートの裾をかすめ、やたらと柔らかかなふくらみへと触れる。

「ふあうっ……暴れるなど言ったのにいっ……」

もむと食い入る指を弾くほどの弾力でもって応じてくれる、その触れ心地を堪能して、文字通り尻に敷かれたのだと確信した。

「んむぐ……つぶは、すううっ、はあっ……」

わずかな隙間——尻の谷間から流入する酸素を鼻先で掻き集めるように吸引する。

息苦しきは、ない。ただ、充満した蜜の味に酔ってしまいそう——いっそう硬く隆起した勃起ペニスの有様を思えば、すでに充分酔わされているのかもしれない。なかつた。

「ん……ンンッ、ああ……ジンジン、するううっ……」

鼻息を浴びて浮き上がり、またのしかかかってきては、切なさともどかしさを現すように喘ぎながらくねる、スィーリアのヒップ。

その都度双臀に挟まる鼻先がレース地の黒いショーツと擦れて、クチクチと淫らな粘着音が股布の向こうから響いてくる。

（どんどんあふれて……スィーリアも、こ、こんなにっ）

肉棒を抜き、舐めることで彼女が昂っている、何よりの証だった。押しつけた乳首を、触れた感触ではつきりとわかるほど勃起させて、スィーリアは今にも染み出しそうなほど

ショーツの股布を濡らしてしまっている。

直接拝むことは叶わずとも、記憶を頼りにまざまざその姿を脳裏に思い浮かべることができてしまう。おかげで彼女の手の内にある肉棒が、弾けそうなほど強張り、脈打った。

「んふあ……あ……！もう、出る……のだな」

（ああ……頭がくらくら、するう……）

スカートの中にももる熱気は、今やふたり分の体熱で茹だるほどだ。充滿する甘い香りに侵されて、鼻腔から頭の芯がのぼせ上がってゆく。

「あむ……んっふ、すぐにらふあふえへやるふあら……」

すぐに、出させてやるからな——。嬉しげに鼻を鳴らしてささやいた恋人の声は、加えた肉棒のせいでもぐもぐもって聞こえた。

——びぐんっ！　びぐびぐっ！

「んくあああっ！」

温かな口内粘膜に再び包まれるなり、肉棒が歓喜に打ち震え、透明の先走り汁を彼女の菌茎、頬裏へと吐きつける。それをまた嬉しげに鼻を鳴らし飲んでくれるものだから、際限なく増長した勃起ペニスには延々脈動と先走りの射出を繰り返してしまう。

「えは……ちゅぢゅううう……らひへ、いいふあらア……！」

一端亀頭から口を離して竿の脇腹をなめしゃぶり、焦らしたところで再度パクついて、

尿道に浮いた先走りを吸い立てる、スイーリア。

(う、うううっ……も、もうすぐっ……出る……！)

腰の芯から脳天にまで、繰り返し繰り返し突き抜ける肉悦樂を与えてくれる彼女の顔は、きつとまた蕩けきっていて、鼻先を伸ばし食欲にペニスに食いついているのだろう。想像するほどに、もつと淫らにしてやりたい——湧いた新たな欲求が、ギリギリのところ射精の予兆を抑え込んだ。

——といつても、射精が間近に迫っていることに変わりはない。ほんのわずか、その時を先伸ばしにしたに過ぎなかった。

「ぢゅぢゅ……っ！」

ゆえに手早く、がむしゃらに。顔の上に乗る黒いショーツに、伸ばした舌を這わせ、唾液をベツトリまぶし、舐めしゃぶる。

「んぷあ……?! あんっ、た、貴弘っ。今日は私が奉仕をするとッ、やつ、あ、ああ、っく、ああ……ん——っ！」

(甘くって……ネバナバナで、うあ、ああっ、意識が飛んじやいそおっ……)

鼻から息を吸えば、スカート内に充滿した恋人の香りばかりが肺の中へ流入した。小さく薄い、汁濡れの股布を脇に押しつけ直接割れ目をねぶり始めた舌先は、吸いつく間もなく止め処ない蜜で浸され、飲んでも飲んでもあふれてくる甘酸っぱい味わいに、今にも溺



れてしまいそうになる。

身体の内も外も、同時に愛でられているかのような、不思議かつ幸せな感覚の中。ジワジワと腰の根元から迫り上がる予兆を抑え込む意識のたがが、緩んでいった。

「れる、っ、ちゅぢゅっ！ んぽっ、んっ、んぷぶっ！ らひれっ……ふあらひのくひろらふあひっ……んふうっ、んぶっぽぶぢゅぶううっ！」

出して。私の口の中に。早く——！

訴えと共に再開された口唇愛撫の激しさに、啜えられた肉棒は生温かな唾液の波に浸る幹震わせ、濃密なカウパー液を吐き連ねる。

（うく、うう！ はあ、はああっ……スイーリア、スイーリアっ、スイーリア……！）

愛しい人の名を心中で何度も叫びながら、唾液と蜜でテラテラ濡れ光る割れ目をねぶり、あふれる蜜を飲み続けた。蜜を飲むほどに、彼女の口内で濃い先走りのツユを漏らしては、自ら腰を振るって、桜色の粘膜のそこかしこへと塗りつけていく。

「んぐ！ んんんっ！ れぢゅりゅりゅるっ！」

気持ち乱暴に口内を抉られても、彼女は決してペニスを吐き出しも、手放しもしない。それどころかより深く、根元までズッポリ飲み込んで、絡めた舌で執拗にカリ首を擦る。唇と喉奥の二段構えで勃起した幹を締め上げてくれた。

（うっ、くっ、そ……もう……もた、ないっ……っあああああ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>